72
令和元年9月27日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容禄に学ぶ（六四）

第四六則　徳山学畢

〔示衆〕

衆に示して云く、万里も寸草なきも、浄地は人を迷わす。八方に片雲なきも、晴空は汝を賺す。是れは以楔去楔であり、拈空柱空にすぎぬ。では、脳後の一槌とは別なる方便を看よう。

〔本則〕

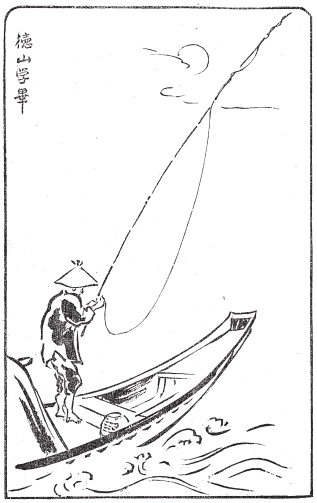
挙ぐ、徳山の円明大師、衆に示して云く、「及尽し去るや？」（這箇の在るあり。）「直に得たり、三世の諸仏は、口を壁上に掛くることを。」（留取て飯を喫せよ。）「猶お一人あって呵呵大笑す。」（且道、是れ誰そ？）「若し此の人を識らば、」（是れ何の面目ぞ？）、「参学の事、畢んぬ。（椀茶を与えて喫ましめん。）

この則の中心人物は、徳山縁密（生没年未詳）さん。徳山といえば、「臨済の喝」とならんで、「徳山の棒」で知られる、かの唐代の徳山宣鑑があまりにも有名です。それに対して、縁密さんの方はほとんど知られていません。

この方の伝記は、ほとんどわからないのです。ただ、雲門宗の開祖である雲門文偃の法嗣でありまして、唐代の宣鑑が道場を開いた澧州（湖南省）徳山の第九代目の住持になったことから、同じ「徳山」の名で呼ばれているのです。

縁密は時の王朝から円明大師という大師号を受けていますし、また、師匠の雲門さんが多くの門人たちを指導するための機関（すぐれた言動）の中で、とくに有名な「雲門の三句」は、じつは縁密の創作だといわれていますから、並はずれてすぐれた禅匠だったのですね。この方をテーマとする本則はむろん『従容録』初登場。

でも、やさしくはありません。しかも長い。心をひきしめて参学しましょう。



まず、例によって万松さんが全体の大意をのべた〔示

衆」をみましょう。

少しも妄念や分別がなくなっても、そんな悟りの心境はかえって人を迷わすぞ！仏道修行というものは、悟りの世界に滞ってしまい、自由な心のはたらきを失った立場をもぬけ出て、空や無におちた者を大笑いできる力量をそなえてこそ、はじめてホンモノだ。

およそこんな意味でしょうか。すこしむつかしい語句がありますね。「万里無寸草」とはもともと洞山良价さんの言葉で、砂漠なんかをいうのではなく、どんなすばらしい悟りに達しても、その悟りに執着したら自由なはたらきができませんから、それを戒めるための箴句なのです。「楔でもって楔を抜く」とは、一本の楔を打ち込んで他の楔を抜き取ることで、つまりは同じことのくり返しをヤユする語。

つぎに眼目の本則です。

縁密が雲水たちを集めてのべた。「あらゆる存在物の本質を極めつくしたかな?」「ただし、先徳たちは究めつくしても軽々に口には出さなかったぞ。」「もしたれかがそれを見て大笑いできるなら、その者はもう修行なんぞ卒業さ。」

こんなところでしょうか。このような、つぎつぎにたたみかける質問語法は、表現を徹底させるためで、いわば老婆親切な言葉といえるでしょう。この一語一句についての万松さんのコメントが、またすばらしい。とくに最初の縁密からの「きわめつくしたかな?」に対する「這箇の在るあり」には、正直なところビックリ。なぜならば、かの京都大学名誉教授で中国言語学の泰斗であられた入谷義高先生が、『禅語辞典』の序文冒頭で、幸田露伴の「猶は這箇の有る在り残る暑さかな」との名句を紹介されているのをわたくしは知っていたからです。

雲門山の放生池

入谷先生は右句の典拠などにはふれず、言語「猶有這箇在」の「這箇」は残暑であるが、表面的な句意は「まだそれの印がシッポを残している」意味と説明された上、「それ」という悟りを尊しとする意識の残存を批判している句だと的確に喝破されるのです。

入谷先生が『従容録』を精読されているのはもちろん、わたくしは露伴が味読していることに、近代知識層の教養と禅の影響を思うのです。

感銘しますのは、入谷先生の喝破は、すでに「徳山学畢」一則の眼目を説き明かしていること。つまり、どんな良いことであっても、それに執着してしまうと地獄行きだというおぞましさ。

わたくしたちは、平凡ながら淡々と愚直に生きたいものであります。

特集　一日接心

一夜接心から一日接心へ

我孫子市　刑部　一郎

昨年まで、一泊の一夜接心を行ってきたが、今年から宿泊をやめ、一日接心とした。そこに至った審議結果等を報告しよう。

接心は昔、バスを仕立てて一泊の坐禅旅行を行う形で実施していた。しかし、大悲殿ができ、炊事や寝泊まりができるようになり、近年、一夜接心になっていた。

ところが、最近は一夜接心への参加者が減少してきた。平成二九年は総数二二名、うち、泊まりの参加者は一三名だったが、平成三〇年は総数二一名、うち、泊まりは九名と、とうとう一桁になった。このため、一夜接心のあり方について検討する必要に迫られ、平成三〇年六月二四日の第二三回坐禅普及委員会で、最初の検討を行った。

一夜接心は非常に魅力があるという人もいるが、若い女性には泊りに対する拒否反応があり、宿泊を障害と考える人がいたりする。そこで平成三〇年一〇月二八日の委員会で第二回審議を行い、一夜接心に代わる新しい行事について検討した。

検討の結果、二案に意見が集約した。一つはこれまで一泊二日で行っていた一夜接心を、一日の中で消化するというもの。朝九時頃から夕方五時頃の間に、午前、午後それぞれ二回の坐禅、一回の禅講を行う。そうすれば午前、午後の片方だけ出たい人にも対応できる。

二つ目は全く発想を変えて楽しい禅の集いに変えて行くという案。そこで、次回にこの二案の具体的案を審議することとした。

二日の行事を縮小、一日で

平成三〇年一一月二五日、委員会で第三回審議を行った。第一の案は朝九時から夕方五時まで、午前と午後にそれぞれ坐禅二回、禅講一回、という案。第二は禅の集いとする新しい企画で、朝六時から夕方四時まで、坐禅二回、掃除作務、食事、お茶（お菓子を頂きながら懇談）、禅を聞く会（一般の人にも関心のあるテーマで）、仏教的行持、例えば写経等を行うというものである。

第二案は非常に魅力的要素がたくさんあるが、あまりにドラステックな変更であり、別の機会に譲ることにし、今回は第一案を基本にして、検討を進めることにした。

平成三一年一月二七日に第二八回委員会で第四回審議を行った。一日案としての差定の詳細について検討。開始時間を午前九時から八時に変更することにした。

平成三一年二月二四日、委員会で第五回審議を行った。参加対象者は一般の人とする案もあったが、「初心者は定例参禅会から来てもらい、今回は会員を主体とする」ことにし、名称も「**一日接心**」に決定した。

非常にスムーズに進行

開始時間は八時とし、午後の行茶をやめ、終了時間は午後五時とした。また、①参加者は可能な時間帯から参加することができる。②希望する時間に退出してよいとした。そこで、坐禅、禅講の前後に休憩を入れ、経行をやめ、入退出が自由になるようにした。

平成三一年三月二四日、第三〇回委員会で第六回審議を行い、「会費は一律一〇〇〇円にする」と決まった。御老師から禅講は午前「参同契」、午後「宝鏡三昧」にするとのお話があった。

令和元年六月二日、初の一日接心が行われた。参加者は三三名と多く、進行はほぼ予定通りだった。参加者の全体としての感想は、「非常にスムーズに進行し、よかった」というのが多かった。

「一日接心」が発足

柏市　坂牧　郁子

昨年まで、一泊二日の「一夜接心」を行っていたが、参加者の減少もあり、今年から「一日接心」として行うことになった。

六月二日（日）、三三名が参加。五月には夏日があり、暑い日が多かったが、当日は程好い日和。前日行われた作務でツゲやツツジの玉垣の形が整い、境内は凛とした雰囲気が漂っていた。

時間厳守で開始

七時四〇分の受付開始から時間厳守で、一日接心が始まった。大悲殿は講演台を中央にコの字型に机を配置。どの位置からも御老師の講義を聞くことができる。

・オリエンテーション（八時～八時一〇分）

小畑代表幹事が次のように述べた。

「接心とは集中して坐禅すること、心を治めること。以前は七炷でしたが、本日は四炷。一度坐った単と同じ単で坐禅して下さい」。

雲堂前、扁額の下に御老師が立たれ、全員低頭して入堂。御老師が「これより一日接心開始！」との大きな声を出され、外単にある大きな鐘を三鐘し、接心が始まった。

・一炷（八時二〇分～八時五〇分）

坐禅開始後、口宣があり、「当山は参禅道場の看板を掲げている。看板は中身が伴っていないといけない。道場にとって成道会と接心が大切である」とのお言葉。

口宣後、ややあって「初めから居眠りをしない！」と大声で喝。「坐禅に備え、前日からの準備が大切。体調を整えるべきである」と、以前言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

・二炷（九時一〇分～九時五〇分）

入り口に用意された『善勧坐禅儀』を持って坐す。御老師の「教本を取って」の言葉で斉誦を始める。なかなか揃わなかったが、「端座六年から」当たりから斉誦となった。「坐禅は習禅に非ず」で一区切り。その後、警策が行われた。

二炷後に、一回目の禅講

・一回目の禅講（一〇時一〇分～一一時）

『やさしく読む参同契』を講義。

・記念撮影（一一時一〇分～一一時四〇分）

本堂前で。

・昼食（一一時四〇分～一二時二〇分）

「五観の偈」を斉誦後、食事。献立はうどん汁、タケノコの炊き込みご飯、野菜のうま煮、春菊のごま合、菊花かぶ、ウドのキンピラ、大根の酢物、白玉のきな粉添え、いちごジャムを乗せたクラッカー、漬け物、タクワン。食事も修行。黙々とおいしく頂く。五十嵐さんから「教本は壁に立てかける」「親指と小指で挟んで持つ」との注意があった。

全員で後かたづけ後、しばし、休息。雲堂の裏手を散策したが、竹落ち葉がふかふかとやわらかい足裏の感触。竹林は木もれ陽がさし、山百合は草丈を伸ばしている。あじさいも彩を兆しながら毬となる一歩手前。

・三炷（一三時一〇分～一三時四〇分）

・二回目禅講（一四時～一四時五〇分）『やさしく読む宝鏡三昧』を講義。

・四炷（一五時一〇分～一五時五〇分）

教本の「唯是安楽の法門なり」から斉誦。出だしはやはりそろわない。

・「これにて一日接心円成！」の御老師のお言葉後、外単の鐘一鐘で終了。

◇　◇

・茶話会（一六時～一七時）

各人が感想を述べたが、典座さんへの感謝の声が多かった。

最後に、御老師から幹事と典座さんへの感謝の声とともに「接心も大勢の参加が本筋かと思う」とのお言葉があった。

参同契・宝鏡三昧の講義

一日接心では御老師が「参同契」と「宝鏡三昧」について講義をされました。概要は次の通りです。

［参同契］

かつて、大宝輪閣が出している雑誌『大法輪』で『参同契』について、連載しました。参禅会四五周年を記念して、これに加筆して『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』を出版することになりました。本日はその概要をお話しします。

『参同契』は五言律詩という形の漢詩の形を取った**偈頌**で、書かれたのは六祖慧能禅師から二代後の石頭希遷禅師で、西暦七〇〇年代のことです。

「参」は不揃い、個々の特徴を表したという意味の言葉、「同」は一緒にする、一緒になるという意味です。「契」はピッタリする、素晴らしいことを意味し、参同契は「仏教の根本原理」を表したものです。

本の八一ページで回互と不回互という言葉があります。回互は一致している、不回互は一致していないことを指しています。回互は理の世界で、不回互は足（実践すること）で、実践しながら向上するのが坐禅です。明と暗と言う言葉も出てきますが、明は事、暗は理を表しており、同じようなことを指しています。

『参同契』は「人間が人間としての道を歩んでいく」、「そのためクリエート（創造的）で、将来、希望を持って生きていくための**偈頌**」です。

人は教えられて生きていますが、自分も人に教えるという意識がないにも関わらず、他の人に教えています。死ぬまで勉強です。それが人生を豊かに実りあるものにします。

講義される御老師

［宝鏡三昧］

「宝鏡三昧歌」ともいいます。ここでいう「歌」は歌曲（詩のついた歌）で、唐の時代では節をつけた方が覚えやすいということで、このような形が流行りました。

『宝鏡三昧』は四言律詩の形をとった偈頌で、インドの教えを漢文に翻訳、リズミカルに表現したものです。字数は参同契の二二〇字に対し約一・七倍の三七六字あります。

「宝鏡」とは神を表す言葉で、鏡は神そのもののことです。「三昧」とは雑念を捨て去り鏡のようになった心です。つまり、「坐禅や念仏の修行によって到達した大安心の状態」です。心を集中しないと「三昧」は得ることができません。

仏教には思量（こだわりがある）と非思量（こだわりがない）がありますが、三昧はそれにかかわらない状況です。

仏教の愛は「恋愛」などの言葉が含む「愛」とは別物です。愛は執着であり、自由から束縛、心を奪うものです。

一二七ページに「如是の法、仏祖密に付す。なんじ、今これを得たり、宜しく能く保護すべし」という言葉があります。これが、宝鏡三昧のエッセンスです。

洞山はこの『宝鏡三昧』を（インド仏教の）名訳と言っています。宝鏡三昧によって磨かれ、現実と実践を一つにして、宝石のような三昧を味わってもらいたいものです。

一夜接心の歴史

流山市　中嶌　宏誠

昨年まで「一夜接心」が行われていたが、今年は宿泊をやめ、「一日接心」として挙行された。過去三四年にわたって行われた接心。その足跡を辿ってみよう。

一回目は昭和六一年に弥勒寺で

昭和六一年六月、「龍泉院」を離れ、坐禅三昧に精進すべく、「一泊参禅」を行うことにした。

一回目の「一泊参禅」は、群馬県沼田市山中にある「迦葉山龍華院弥勒寺」。山主羽仁素道老師が「願いに生きる」の法話をなされた。参加者一九名。

二回目は昭和六二年七月、前年に続き「弥勒寺」。深夜、山中で鳴く仏法僧の声が雨音の中で響いていた。参加者二三名。

三回目は昭和六三年六月、南足柄市大雄町にある「大雄山最乗寺」。余語翠巌老師が「天地法界の風光」の法話。参加者二八名。

四回目は平成元年六月、栃木県那須郡黒羽町にある「黒羽山大雄寺」。途中、佛国国師高峰顕日禅師開山の雲巌寺に立ち寄り参拝。参加者二五名。

五回目は平成二年六月、栃木県沼田市にある「久谷山常真寺」。皆川老師の法話は「釈尊の常道への道」。参加者二三名。

六回目は平成三年六月、前年と同じ「常真寺」。皆川老師の法話は「難病ジストロフィー症の北原敏直君が書かれた詩について」。参加者一八名。

七回目は平成四年六月、積年の夢だった「大本山總持寺」。東老師の法話は「坐禅の心構え」。参加者二三名。

八回目に初めて龍泉院で

八回目は平成五年六月、観音堂の改築を終えた「龍泉院大悲殿」で挙行。参加者一六名。

九回目は平成六年六月、前年に続き「龍泉院大悲殿」。参加者二二名。

一〇回目は平成七年六月、静岡県袋井市の「秋葉荘本殿可睡斎」。中野東禅老師が後堂をお勤めの寺院。参加者二四名。

一一回目は平成八年六月、千葉県多古町の「一鍬山福泉寺」。元小学校教諭で、〝山びこ学校〟の著者、住職無著成恭老師の法話は、「宗教教育はどこまで可能か」。参加者二四名。

一二回目は平成九年六月、「大雄山最乗寺」に一〇年ぶり二度目の上山。山主石附老師が法話。参加者二七名。

一三回目は平成一〇年六月、龍泉院大悲殿。参加者二六名。

一四回目は平成一一年六月、前年と同じく大悲殿。参加者二四名。

一五回目は平成一二年六月、大悲殿、参加者二一名。

一六回目は平成一三年六月二九日から七月一日の三日間、「北陸祖蹟参拝研修の旅」。「参禅会発足三〇周年記念接心」となった。仙福山宝慶寺で三時三〇分起床して、暁天坐禅。大本山永平寺、金龍山天徳院、洞谷山永光寺、諸嶽山總持寺祖院、高岡山瑞龍寺を上山参拝。参加者二九名。

一七回目は平成一四年六月、大悲殿。参加者二七名。

一八回目は平成一五年六月、同じく大悲殿。「一夜参禅」を「一夜接心」に改称。参加者二五名。

一九回目から昨年三三回目の平成三〇年六月まで龍泉院大悲殿で。

三四回目、令和元年の今年は宿泊をやめて「一日接心」が挙行された。

坐禅は心静かで 清らかで、安らいだ自己に出会う！

合掌

山内動静

降誕会（花まつり）

花冷えの四月八日、降誕会が行われました。参加者は御老師、参禅会会員一二名と一般の方一名の計一四名。今年は、梅花講の皆さんの奉詠がなくなり、寂しくもありました。

配役は、先導に小畑代表、副堂に五十嵐さん、侍者に松井さん、侍香に小畑二郎さん。維那と殿鐘は杉浦さんが兼任しました。

「成道」について講義

一三時に本堂に集合。準備を済ませた後、いつになく気合のこもった、緊張感あるリハーサルが行われました。

降誕会は御老師の「百花繚乱の時を迎え、建築の槌音も高い、花冷えの中、平成最後の降誕会を行う」の言葉で始まり、椅子席の参加者も全員「五体投地」を行いました。

法話では、二九歳ですべてを捨てて出家した釈迦が、六年間の厳しい修行を経て、「生老病死」の苦しみを考え抜き、忽然と悟りに至った「成道」ついて話されました。

また、平成最大のヒット曲として私たちも知っている「世界に一つだけの花」をたとえに、「その人なりに、与えられた境遇の中で、自分だけにしか出来ないことが必ずある。そのために、人は生まれ、生きていく」と生きることの大切さを強調されました。

御老師に続き、参加者全員が花御堂に合掌・低頭。お釈迦様に甘茶をかけました。当日、花御堂に綺麗な花々が添えられていましたが、この花は、御老師が手ずから境内から摘んできたとのことです。

なんのために生まれたか

甘茶も御老師が作られたものでした。この時期、大黒様が体調を崩されていたためです。参加者一同、大黒様の早いご快癒を祈りました。降誕会が無事円成後、坐禅堂で一炷坐り、茶話会では甘茶を頂戴しました。

散会後、外へ出ると冷たい雨が降っていました。「栞の葉（山門脇の掲示板）」に、次の言葉を見つけました。（上の写真）

一〇年前の二〇〇九年の降誕会の時に書かれたものです。

「あなたは何のために生まれてきたのだろう　それはきっとあなたにしか出来ないことをするためなんだ　平成二一年四月八日　恒例花まつり」

「成道」について説明なさる御老師

栞の葉（山門脇の掲示板）

龍泉院の本寺真如寺の開山忌

取手市　近江　礼子

六月二四日、龍泉院の本寺である木更津市真里谷（まりやつ）の真如寺（しんにょじ）で密山正厳禅師の開山忌が営まれた。

午前八時二〇分、御老師をはじめ小畑節朗氏、小畑二郎氏、近江の四名が、吉岡大龍師運転の車に乗り、雨の中を出発した。時々の激雨にも拘わらず、地震にも気付かず、予定通り九時五〇分に紫陽花が咲き誇る荘厳な真如寺に到着した。

一　真如寺

天寧山（てんねいざん）真如寺は、木更津市の東端、武田川の南、戦国期の真里谷城跡の北西に位置する。室町時代中期の寛正五年（一四六四年）創建の古刹で、開基は甲斐武田一族の武田三河守信興（真如寺殿照堂道鑑大居士）、本尊は釈迦如来である。

開山は、関三刹の一つである埼玉県入間郡越生（おごせ）町の龍穏寺二世の高弟密山正厳禅師である。真如寺は曹洞宗の修行道場として「上総の高野山」とも呼ばれ、北条氏に続き徳川氏の庇護を受け、天正一九年（一五九一年）には徳川家康から朱印地三〇石を賜った。堂塔伽藍三十余、寛永一〇年（一六三三年）には末寺四九カ寺、孫末合わせて二百数十カ寺を数えた。

しかし、明治元年、徳川方の残党五〇〇人が真如寺に立て籠もったため、官軍により放火され、堂塔伽藍が全て灰燼に帰した。平成三年に現本堂・客殿が再建された。本堂右手の山上には、平成二六年（開創五五〇年）、道了尊堂が再建された。

ちなみに、龍泉院は、真如寺六世量指長英大和尚により、天文年間に開山された。

二　開山忌

午前一〇時半、本堂で檀信徒約三〇名に、成田市渕龍寺住職による法話があった。「心を込めて開山忌に臨み、心を込めて焼香する」との心構えを示唆して頂いた。

同一〇時四五分、いすみ市勢國寺の住職を導師（焼香師）に、真如寺末山会の僧侶約二五名により、開山忌が始まった（写真参照）。事前の案内状には、開山忌（十八拝差定・出班焼香）とあったが、当日頂いた「開山忌差定」には、詳細が次のようにあった。

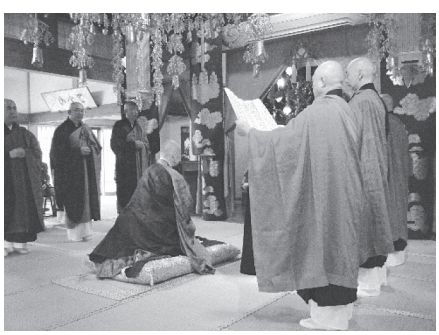
殿鐘三会大衆上殿、七下鐘導師入堂、上香三拝、湯食三拝、親（曩）金菓三拝、茶鼓一通、焼香三拝、献茶三拝、中揖三拝、法鼓三打、拈香法語、開班、検炉、出班焼香、大衆九拝、閉班、宣疏跪炉、納疏、読経（参同契・宝鏡三昧行道）、略回向、普同三拝、退堂、散堂。

一一時三五分、つつがなく円成した。粛然とした格式のある素晴らしい法会に目を見張り、五〇分が短く感じられた。

十八拝差定とは両祖忌・開山忌の法要で、導師が一八回大展して礼拝することを指す。また、開班から閉班の出班焼香も最も丁寧な焼香であり、貴重な機会を得た。

終了後、墓前諷経の予定だったが、大雨のため略された。その後、客殿で真如寺末山会総会が開かれ、昼食を御馳走になった。墓前諷経を期していた筆者は両小畑氏と共に、裏山にある歴代住職の墓地を訪れ、密山正厳禅師の墓塔に深く手を合わせた。

真如寺の開山忌に参列の機会を与えていただいた御老師に、深く感謝申し上げます。



施食会

八月一六日、龍泉院の「施食会（せじきえ）」が行われました。亡き人々、祖先を想う一日です。龍泉院の年間行事の中では最も重要なものです。一二人の僧侶の方と約六〇名の檀家の方々が参加されました。例年に比べ参加者が少なかったのは、台風一〇号の余波で、風が極めて強く、雨も懸念されたからでしょうか。

ただ、法要後、塔婆が並べられたころには大勢の方がいらっしゃいました。今年、新盆を迎えられた方は二四名。この一年以内に身内を亡くされた方々が多く参列されました。

法要に先立ち、午後一時から、東京永伝寺住職川上宗勇老師が次のような法話をされました。

「曹洞宗では第一義に坐禅が重要。何故か？お釈迦様が悟りを開いた際に行っていた『禅定』＝『坐禅』であったからです。『坐禅』と『ヨガ』の違いは信仰があるかないかによるものです。『仏心・仏性』をもって仏道を修行することが、そのまま『坐禅』なのです」。

その後、同師の指導のもと、参加者全員で椅子坐禅を行いました。

多くの僧侶が参加した施食会

法要は二時から始まりました。各寺院から来られた僧侶が参列した後、御老師が入場、厳粛な雰囲気の中、法要が営まれました。修証義を全員で唱える中、参列者が新盆の方々を先頭に参拝。最後に裏方を務めた護持会の方々や作務に参加した参禅会員が参拝、法要は無事、円成しました。

◇　◇

施食会には参禅会員が延べ一五名参加。〝縁の下の力持ち〟を演じました。当日は八時半に集合。男性が一三名、女性が二名。二人はお茶の接待、給仕そして準備・後片付けと忙しい中、笑顔で接待してくれました。

男性会員は午前中、全員で、本堂内での設営。午後は本堂と駐車場の担当に分かれ、本堂は塔婆の整理、会場の後片づけ、駐車場係は車の誘導を主に、四時半過ぎまで作務に努めました。皆が汗を流して、「自未得度先度他」の修行に努めました。

終了後、御老師から慰労の食事をふるまわれ、梨などをお土産に頂戴、「施食会」大法要の作務は終わりました。

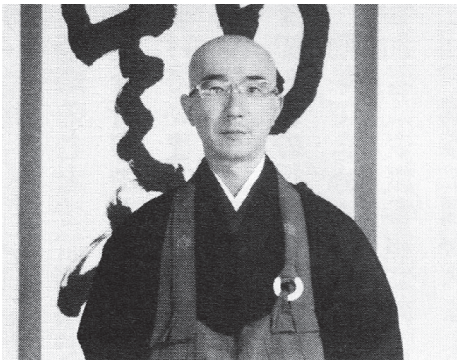
その際、参禅会員の作務奉仕に対して、特段のねぎらいと感謝のお言葉を頂戴しました。

準備にいそしむ参禅会員

次期住職候補、明石さん

御老師後任の住職についてご紹介させて頂きます。

名前は明石直之（あかしじきし）さん。四四歳。京都府宇治市に生まれ、高校は府立西宇治高校。大学は名門の龍谷大学を出て、陸上自衛隊に入隊されました。



次期住職候補の明石直之さん

以後一八年間の隊員生活を経て平成二六年、幹部候補の一等陸尉（昔の陸軍大尉）で退職。昔からあこがれていた僧侶となるため、京都府宮津市**智源寺住職高橋信善老師**について出家得度されました。

五年の修行を経た現在、修行中の雲水さん一〇名ほどの中で最古参のベテラン禅僧です。なお、智源寺は江戸時代の初めに**京極高広**が建立した曹洞宗の名門。壮麗な伽藍と伝統のある修行道場です。

明石さんは坐禅と読書を好まれ、隊員中に取得した車の免許は四つに上り、柔剣道の心得もある頼もしい一面もあります。

目下、独身です。（この文は『寺報』に載った御老師の文を御老師の了解を得て、短くまとめたものです）。

◇　◇

明石師はすでに龍泉院には何度かご来山され、特に三月の護持会総会の時には、現住職から檀信徒の皆さんの方々にご挨拶されたそうです。

当分の間は龍泉院近くに居住され、諸行事や皆様とも親交を深めていかれるとのことです。

まだ、御老師の退任時期は決まってはいませんが、永年、参禅会をお導き頂いた椎名御老師の御退任は大変残念で寂しい思いです。ただ、「理解と賢察をしてほしい」というのが御老師の希望です。

東堂の上棟式

四月一三日、晴天の土曜日、東堂の上棟式が古式にのっとって行われました。

青い空、白い雲、たなびく五色の吹き流し。清涼な雰囲気の中、緋色の袈裟を召された御老師の読経・祈祷が始まりました（写真参照）。

その後、そろいの法被を着た棟梁、宮大工による、棟木を屋根の天辺に上げる曳綱の儀、そして、槌打ちの儀が厳粛に執り行われました。

東堂と宝蔵は九月に竣工しました。

松井さん

齋藤さん

作業の合間に一休み

修行を一服、タケノコ掘り

四月二八日（日）、茶話会の後、恒例の「タケノコ掘り」が行われました。参加者は二八名。前回よりかなり多くの方が参加しましたが、タケノコの方は天候不順で大不作。参加者には一人三本程度。それも小さかったり、大きかったり。でも、みんな笑顔で楽しみました。

御老師は事前に「例年の五分の一程度しか生えていない」と言われましたが、それよりは多かった感じです。

曹洞宗では火・風・水・地を四大といい、病気のことは「四大不調」と言います。ところが、御老師の著書『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』では、「四大不調が環境にも及んでいる」と警告しています。タケノコ掘りはまさに、それを実証した形です。

小林さんが事前に収穫場所を整備してくれたので、掘るのは楽々。しかも、来年の収穫を増やそうと、かなり多くのタケノコの横に「取らないよう」という札をさしていたので、来年は期待できそうです。また、松井さんがアク抜き用の米ぬかを寄贈してくれました。

刑部さん

小林さん

坐禅普及委員会の報告

新委員でさらに活発化へ

平成二五年に坐禅堂が完成しましたが、外単に掲げられた「常規」の第一番に、「雲堂は公界（くがい）の道場にして、修道者には常に開放を惜しまず」というお示しが書かれています。これは新しく建立された坐禅堂が龍泉院参禅会員だけが坐るものではなく、広く人々の修行の場として活用されることを目指しているからなのです。

ところで、『正法眼蔵坐禅箴』の巻には、「初心の坐禅は最初の坐禅なり、最初の坐禅は最初の坐仏なり」とあります。そこで新しくできた坐禅堂を「初心の坐禅」の場とするために、平成二六年に坐禅普及委員会が立ち上げられました。

坐禅体験会を二一回実施

坐禅普及委員会では坐禅を一度体験してみたいという人（グループ）に、坐禅との出逢いの場を用意し、サポートする坐禅体験会を企画。これまで二一回実施してきました。坐禅体験会は基本的には坐禅堂で行いますが、柏パレットや開智国際大学などへ出向いたこともあります。

これまで体験会に参加された人は、若い自衛隊の隊員から、老人大学の方まで幅広い年齢層にわたっており、外国人が参加した体験会もありました。坐禅体験会の中から参禅会員になられた方もいらっしゃいます。

坐禅普及委員会では坐禅体験会の実施以外に、参禅会の運営全般にわたる事項についての検討も行っています。例えば、昨年まで行われていた一夜接心は参加者が年々減少してきたことから、参加しやすいように宿泊をなくした一日接心に変更し、その差定を検討しました。新しく参禅会に入った会員への対応についても検討を重ねてきました。

三つの係が分担して活動

坐禅普及委員会には広報係、庶務係、坐禅係があります。広報係は坐禅体験会を広く知らせることを任務としています。庶務係は坐禅体験会当日の行事全般の運営と司会、報告書の作成などを行います。坐禅係は体験しようとする方の坐禅を指導します。

現在、広報係を中心に各種団体へ坐禅体験会を勧めるアプローチを行っています。皆様で坐禅体験会を勧めたいと思う団体がございましたら、坐禅普及委員会へご連絡頂くか、茶話会の時にお知らせくださると、大変助かります。

また、坐禅普及委員会が設立されてから六年が経過しましたので、委員の若返りを図りたいと思っています。これまではベテランの方々に委員をお願いしていましたが、参禅歴の若い方々にも積極的に参画して頂きたいと考え、賛同を得ました。

六月の「海印三昧」の巻のご提唱には「一波纔かに動ずれば、萬波隨う」とありましたが、皆様方の坐禅を推進する動きがやがては大きなうねりとなり、坐禅が全国から全世界へと広まってゆくことになると期待しています。

是非、委員に参加を

「菩提薩埵四摂法」には四つの修行が説かれており、その一つに利行（他の人のために力をつくす）があり、「利行は一法なり、あまねく自佗を利するなり」とあります。他人のために尽力すれば、結局、それが自分のためになるのだと説かれています。

坐禅の経験がまだ少ないからと遠慮する必要はありません。自分の修行だと思って坐禅普及委員会に入り、坐禅体験会のサポートをされんことを切に願っています。

想うこと

イチローの生きざまに学ぶ

我孫子市　清水　秀男

偉大なる野球人イチローが今年三月、日米通算二八年間の現役生活に終止符を打ちました。彼が打ち立てた素晴らしい記録は日米通算四三六七安打をはじめ枚挙に暇がありません。

打撃のみならず、強肩、俊足。守備や走塁でみせたスピード感あふれるプレーは多くの人を魅了しました。パワー全盛の大リーグに、野球の面白さを再認識させた功績は大と言えます。

彼の輝く金字塔の花は、表面には見えないそれを支える大きな根があることによって、咲き誇っていると言えるでしょう。その根は引退会見の中で、野球人生を振り返った言葉に見出す事ができます。

「あくまで、はかりは自分の中にある。自分なりにそのはかりを使って、自分の限界を見ながらちょっと超えていくということを繰り返していく…少しずつの積み重ねでしか自分を超えていけない…地道に進むしかない…自分がやると決めた事を信じてやっていく…遠回りをすることでしか本当の自分に出会えないという気がしている」

彼の一つひとつのプレーは、想像を絶する地道な鍛錬の繰り返しと周到な準備の積み重ねによって生まれた作品と言えます。

そして、その作品が出来上がるためには多くの失敗に向き合い、それを克服するべく、遠回りで無駄とも思える試行錯誤を何度となく繰り返していた事がうかがえます。それが結果として、近道を歩んだことを示唆しているのではないでしょうか。

それと何よりも彼の非凡な能力は、自分を冷静に見つめ、慣習や常識にとらわれず、目標に向かってあくなき挑戦をしていく、心の強さにあると思います。

彼の生きざまをみてきて、日本曹洞宗の祖道元禅師の言葉を思い浮かべました。

「いまの一当は、むかしの百不当のちからなり、百不当の一老なり」（『正法眼蔵』「説心説性」の巻）

これは弓矢のたとえによって、修行の大切さを説いた言葉です。今ようやく矢が的に当たる様になって来たが、それは過去何百回という失敗の繰り返しがあり、それにめげずに精進努力を重ねて継続してきた力のお蔭であり、ようやくその縁が熟してきたというものです。

仏道修行もそれと同様である事を教示しています。道元禅師の教えは、彼の野球人生にも当てはまるのではないでしょうか。

大リーグでの通算打率は三割一分一厘で、三〇八九安打を記録しています。従って、全打席九九三二回のうち、六八四三回もの打席において悔しい思い（不当）があった事を、彼はいみじくも語っています。

そして、彼は自分が天才の冠を被せられる事に反発し、「自分は天才とは思わない。（なぜなら）それだけの事をやってきたから」と答えています。不当を出来る限り少なくするために、彼が如何に熟考し努力してきたかを示す言葉と言えるでしょう。

最後に彼が子供たちへのメッセージとして残した言葉を記しておきます。それは彼が歩んで来た道そのものと言えるでしょう。

「自分が熱中できるもの、夢中になれるものを…早く見つけてほしい…それが見つかれば、自分の前に立ちはだかる壁に…向かっていくことができる…自分に向くか向かないかよりも、自分の好きなものを見つけてほしい」。

農作業ですっきり

流山市　市川　洋介

私は、二年ほど前から父と共に参禅会に参加させて頂いております。こうした経験ができ、とてもよかったなと思います。これからも続けていきたいです。

ここ最近、坐禅以外にもやっていることがあります。それは、毎月の月末に一度行われる農作業の体験会です。

そこの農家の方は農薬を使わないので、とてもおいしい野菜が収穫できます。そういった環境の中で雑草をとったり、作物の種を蒔いたり、苗を植えたりしていると、気付いたら気持ちがすっきりしています。

農家の方や参加している方とお話したりしながらやっているので、それも関係しているかもしれません。

もちろん、しゃがみながらの作業も多かったりするので大変です。これを毎日のように続けている農家の方には及びません。

しかし、終わった後は達成感やよい空腹感があります。特に雑草を抜き終わった後は道が綺麗になっており、「頑張った甲斐があったな」と思います。

この体験から思い出すことがあります。当然なのですが、食卓に並ぶ食べ物は様々な人や自然に支えられ、色々な過程を経てここにやってきたことです。

坐禅や他のことにおいてもそうです。あれこれ悩んだりしているうちに感謝を忘れがちな自分ですが、このような想像力は鈍らせないようにしたいです。

一番印象的だったのは久しぶりに触った土の感触です。冷たい土からもタッチパネルに軽く触れるのでは味わえない、何か特別暖かいものを感じました。

坐禅とは大自然と一体化

柏市　吉岡　大龍

二月、父の骨壷を暫くぶりに見た。白い骨壷は中央でなく左にあった。そして隣に大きさが同じ母の骨壷をそっと置いた。

七年半を母と二人で過ごした。一月の参禅会から再参加した。坐禅の足が半分までしか組めなくなっていた。この頃に尿に血が混じったので通院することになった。

この一〇年、皆さんにお世話になった。二月より缶詰工場に勤務しているが、そこでベトナム女性に助けてもらった。体が鈍って作業が時間内に終わらなかったが、その方が自分の作業を終え、私の分を続けてくれた。それに毎日向きあった。私は薬をやめて健康を見直し、まず自分を大切にした。

六月二日、一日接心。皆さん数日前からわくわくしてモチベーションが高かったのか、一炷目から眠ってしまった人が音を立て、堂頭老師の怒号が坐禅堂を凍らせた。

最初からでなく足が痛くなってから、背筋を最強に伸ばすくらいの余裕で坐ることができた。

昼食の前に写真撮影をし、その後、手作りの温かい食事が運ばれた。おもてなしのご馳走を味わいたいが、掻っ込む。味わって食べていると取り残される。

午後の坐禅まで時間があり、庭に出たりしてくつろいだ。大黒様（寺の奥さん）と話をして笑った。ここまで気持ち良い差定を実感した。

客観的に三炷目からは眠る人が出る。そして四炷目は『普観坐禅儀』を全員で誦し、一日接心の盛り上がりとなる。

坐禅とはいったい何なのかと考えていたら、堂頭老師がこう言われた。「坐禅は大自

大黒様としばしの談笑

然と一体になることだ」。納得。エアコンを切って障子を開けた坐禅堂こそ、私が求める場所。初夏や秋は坐禅堂へどうぞ。

それと、坐禅の注意事項を御老師はこう述べられた。「坐禅中に家庭の問題や恋の悩みその他を持ち込んで考えてはならん」。

承知しました。抱え込んだ問題を点検するのではなく、自然にどっぷりつかってもっと一瞬一瞬を大切に生きる。七月、私は泌尿器科を卒業し、坐禅で足が組め、筋肉もりもりに。また、会いましょう。（九拝）

参禅会への参加について

白井市　中原　悦雄

今年四月八日（月）から参禅会に参加させて頂きました。かねて、坐禅をやりたいとの思いがあり、初参加の一週間前くらいから、近隣の禅宗の寺院を数件、訪問調査しており、その一連で、龍泉院にお伺いしました。良い環境だなと思いながら、大悲殿に厚かましくもお尋ねし、私の来意をお伝えしました。

その時、私は意外な説明を受けることになりました。それは今日これから「降誕会を開催するので、参加しないか」ということでした。

心の準備もなく大変な驚きでした。それでも、これはご縁と思い、図図しく降誕会に出席させて頂きました。これが参禅会参加の契機となりました。

まさに、無我夢中の参加でした。それでも、降誕会開催中、足手纏いにも関わらず、さりげなく受け入れて頂いたことは、私には感動的でした。この時、参禅会への入会を決意いたしました。

私は長年ビジネス界に苦心惨憺の連続ながら関わってきました。しかし、次の世代へのバトンタッチの見込みがついて、漸く解放され、自分の時間が持てるようになりました。二〇歳代に恩師から物事を深く考える契機にするためにということで、坐禅会参加へのお誘いがあり、臨済宗の坐禅会に帯同したことがあります。この経験はインパクトが強く、いつかは真剣に坐禅に取り組みたいと思いを続けておりました。

私が禅に惹かれるのは、物事がうまくいかない時、「他の人が、他の組織が悪い」ということにして逃れる風潮がどうしても納得できず、また、そのことによって物事は解決しないという体験を何度もしたことにあります。

結局「自分ならこうする」ということがない限り何も解決しない。自分が深まれば、物事の対応力が一気に高まるということも体験しました。

とはいえ、よく自分の疑問を見つめ直すと、問題の根源は私自身にあり、自分の修行が足りないことに起因するという結論に辿り着き、修行のやり直しを思い立ちました。

そのためには、自分に向き合う坐禅の精神が良いのではという思いに至りました。参禅会入会を機に、私なりに正面から坐禅に取り組みたいと思っております。

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
（　）内は座談の司会者

平成三一年

●三月二四日　三五名（門脇　弘氏）

●四月　八日　一三名（青田　英雄氏）
—降誕会—
幹事　小畑　節朗氏
刑部　一郎氏

●四月二八日　三八名

令和元年

●五月二六日　三四名（市川　信彦氏）

●六月　二日　三三名
—一日接心—
幹事　小畑　節朗氏
刑部　一郎氏
吉澤　誠氏

●六月二三日　二八名（霜崎　美穂氏）

●七月二八日　二八名（斎藤　正好氏）

●八月一六日　一四名
—施食会—
幹事　刑部　一郎氏
五十嵐　嗣郎氏
小畑　二郎氏

●八月二五日　二九名（市川　洋介氏）

【坐禅普及委員会】
三月二四日（　七名）
五月二六日（　九名）
七月二八日（　八名）

〔編集後記〕

▼春から編集委員に参画。全くの素人です。参禅・作務で重ねる年六〇回の上山回数が、少し増えそうです。（修道）

▼春、筍掘りの折、支柱に支えられていたヤマユリが、七月の例会の時は見事に咲き競っておりました。高原の避暑地の雰囲気です。写真に納め、絵葉書としてたくさんの暑中見舞いとなりました。（坂牧）

▼施食会の日、本堂前の弥陀三尊線刻像前に、五〇本以上の金花が厳かに光輝いていました。檀家の皆様の慈愛心を思い、静かに手を合わせました。（近江）

▼団地の行事に駆り出され、最近は参禅会への出席がままなりません。団地の仲間と坐禅会を月二回行って、なんとか補っていますが…。「自未得度先度他」とはなかなかいきません。（岡本）

▼最近、日常生活の中で、よく分からない単語があると、調べることにはまっている。自分が想定していた意味だと、少しうれしく、外れていたら学習になります。（市川）

龍泉院参禅会簡介

【参　禅】

一、定例参禅会
・日　時　毎月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
・坐　禅　口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
・提　唱　木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
・座　談　自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅
・日　時　毎月第一日曜と第二土曜日
・坐　禅　九時から一〇時半時まで（入退堂自由）
※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心　本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等
一、成道会　本年は一二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
一、他の行事　涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）、歳末助け合い（一二月）、団体参禅受け入れ、歳末煤払い（一二月例会後）
一、作　務　毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）
一、『口宣』（年一回）
〔ウェブサイト　http://www.ryusenin.org/〕『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04(7191)1609
●印　刷／東港出版印刷株式会社　目黒区中目黒1—8—8　☎03(5724)7302